

\*\*\* 事 \*\*\*

例会記録

六月例会 平成十五年六月二十八日

順天堂大学九号館二階八番教室

一、「医学館における医学考試について」

戸出 一郎

一、「本草品彙精要」ローマ本・大塚本・ベルリン本の成立

関係」

真柳 誠

七月、八月 休会

例会抄録

天台大師の医学

とくに十乗観法について

杉田 暉道

今日の医学は分析的な思考方法による治療が主流を占めている。したがってわれわれの煩惱と疾病との関連についての研究は極めて少ない。この観点から演者は中国の天台大師智

顛（五三八―五九七）によって撰述され、仏教史上最高の座禪作法の書として使用されている『摩訶止観』の第七章第三節「病患を観ぜよ」に述べられている、「止観（十乗観法）を修せ」に注目し、以下述べる検討を行った。ところでここに説かれている要点は、修行を行っていきときに疾病にかかるのは、煩惱がわざわざいしているからであるとし、したがってこれを徹底的に除去する方法を説いている。

それでは本法について概説しよう。まず心の状態を陰入境界、煩惱境、病患境、業相境……菩薩境と十境に分け、それぞれ的心境において、一、観不思議境 二、起慈悲心 三、安心 四、破法遍 五、識通塞 六、道品調達 七、助道 八、知次位 九、安忍 十、無法愛の十種類の観察法を行うのである。ここでは病患境の十乗観法について検討する。

まず「観不思議境」とは、われわれの人生は刻々と変化して一刻も固定していない。これを素直に受入れて観察できれば、清浄な悟りの世界に到達でき、疾病も治ると説いた。

『起慈悲心』とは、十乗観法の中では特異な章で、看護の心得を説いている。その方法には一、空観による方法 二、仮の観による方法 三、中道観による方法がある。一、空観による方法とは、体の健康状態は良いときもあり、悪いときもあって常に変動するから、疾病にかかってもそれがほんとうの疾病かどうかわからないから、気にしないで素直に疾病を受入れて静かな気持ちで療養するように、看護人は仮に子供と同じ疾病にかかった親が子供にさすように、患者に上手